対話型の芸術鑑賞

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

他者を理解 資質養う

能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。

西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

小学校や美術館で試み

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

（上野敦共同通信記者）

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

広がりみせる 対話型の美術鑑賞

論理的に他者を理解

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

■能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。

「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と工手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

■論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

（上野敦共同通信記者）

■教養■

ルポ 潮流 □15□

対話型の美術鑑賞

他者との関係を築く

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

■能力引き出す

東京都の西東京市立保谷二小で二月中旬、四年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

五、六人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が五十枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち二枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。じっくりと見入って、考えを発表する姿勢が印象に残った。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は二〇一四年度からこうした授業を取り入れ、一六年度には市内の全十九校に拡大する。

■持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は〇三年から、研修を積んだガイドスタッフによる約一時間のツアーを続けている。毎日午後二時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

ある月曜日、四人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝（つね）「エロシェンコ氏の像」など六作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約四十人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

■論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが一九八〇年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんが九〇年代初頭、日本に〝輸入〟。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを一年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

人間関係築く契機に

広がる対話型美術鑑賞

小学校、美術館で試行

看護学生ら対象に研修も

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。

言語能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

資料蓄積 相互利用

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する「一期一会」のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀(切通之写生)」や中村彝（つね）「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など選んだ理由を発表する。見知らぬ人の思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

1年生の必修授業

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小

「主体性育む力ある」

アートライター藤田さん

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するこつを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問い掛けること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性を育む力もある。楽しい上に『御利益』も大きいのです」

ルポ 潮流

対話型の美術鑑賞

他者の価値観を理解

教育現場や企業で試み

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

▽能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。

西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

▽持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝（つね）「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

▽論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

1週間のメニュー

日曜日
■**シニア**　シニアの話題、読み物、ひとこと
■**ときめきゾーン　フリースタイル**

月曜日
■**社会保障**　介護、医療、年金、ひとこと
■**暮らし経済**　買い物、家計

火曜日
■**教育・若者**　教育現場の話題、ひとこと
■**安心・安全**　防災や減災、制度解説
■**ときめきゾーン　エンターテインメント**　音楽・舞台

水曜日
■**文化**　文学や美術、歴史
■**トレンド**　社会現象や流行
■**暮らし総合**　生活のさまざまな話題、問題、ひとこと
■**子育て**

木曜日
■**文化**
■**健康・医療**　医療話題、解説、ひとこと
■**イベント**　県内外の催し物案内

金曜日
■**街**　まちの話題、ひとこと
■**文化**
■**ライフ**　生き方、考え方
■**ときめきゾーン　キャンパス**　県内の高校と大学の話題

土曜日
■**ときめきゾーン　エンターテインメント**　映画・芸能
■**衣・食・住**　ひとこと
■**メディア**　電子新聞を紹介、ケータイ記者

ルポ　潮流

他者との関係築く契機

対話型の美術鑑賞授業

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち　＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

意見に新鮮さ

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する"一期一会"のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

＝随時掲載します

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者　＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

「なぜ」と問いかけること

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に"御利益"も大きいのです」

ルポ 潮流

文化

他者と関係築く契機

小学校や美術館で試み

対話型芸術鑑賞

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。じっくりと見入って、考えを発表する姿勢が印象に残った。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

ある月曜日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんが（つね）「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが19世紀末に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんが90年代初頭、日本に〝輸入〟。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

〈随時掲載します〉

能動的に接し人の身になる

いざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝（つね）「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別の人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

広がる「対話型の美術鑑賞」

他者の意見 新鮮

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

小学校でも試み

「見る能力」引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

能動的に作品と接する

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

文化

ルポ 潮流

対話型の美術鑑賞

他者との関係築く試み

学校や美術館 企業でも

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

■能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

■持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

㊨ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

㊧ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

■論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

能動的に作品捉える

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

ルポ 潮流

対話型の美術鑑賞

他者との関係築く試み

小学校でNPOが実践

作品へ能動的に接して

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚とアートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

＝次回は4月14日掲載予定＝

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

ルポ 潮流 ◀◀◀ ⑬

他者との関係築く試み

対話型の美術鑑賞

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。

「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

ある月曜日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

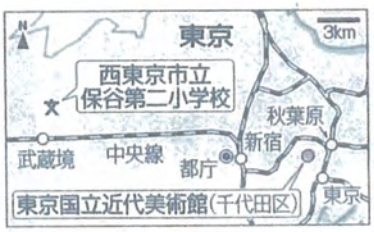
同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校



時間かけ「なぜ」問い

能動的に作品接する

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

ルポ潮流 ⑬

他者との関係築く試み

対話型の美術鑑賞

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。

「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

ある月曜日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

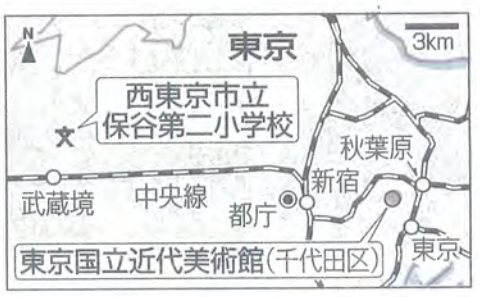
同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校



時間かけ「なぜ」問い

能動的に作品接する

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

ルポ　潮流

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

対話型の美術鑑賞

他者との関係を築く

小学校や美術館で試み

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構(ARDA)」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀(切通之写生)」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

アート作品を通じたコミュニケーション教育について話す京都造形芸術大准教授の伊達隆洋さん＝京都市左京区

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

（上野敦共同通信記者）

ガイドスタッフの川上好美さん㊧の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

ルポ潮流 ⑩

対話型の美術鑑賞

他者との関係築く契機

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。

▽能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構(ARDA)」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内全19校に拡大する。

㊤ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校 ㊦ガイドスタッフの川上好美さん(左)の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

▽持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する"一期一会"のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀(切通之写生)」や中村彝(つね)「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

▽80年代米発祥

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生は「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センター主体性を育む

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」(集英社新書)で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんはアート鑑賞が秘める効能は高いと話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に"御利益"も大きいのです」

は、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探ることを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さん。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

(上野敦共同通信記者)

ルポ 潮流

他者との関係を築く

小学校や美術館で試み

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。

「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

対話型の美術鑑賞

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝（つね）「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

能動的に作品に接する

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さん＝東京都調布市

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

藤田令伊さん

対話型美術鑑賞

小学校や美術館で試み

他者との関係 築く契機に

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。

「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

伊達隆洋さん

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

アート鑑賞 楽しもう

大正大 藤田講師がコツ伝授

藤田令伊さん

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

対話型の美術鑑賞

ルポ

他者と関係築く契機に

相対化し合意点探る

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。

「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

新鮮な体験

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

作品に「なぜ」と問いかけ

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

文化

ルポ 潮流 〈15〉

他者との関係築く契機

対話型の美術鑑賞　学校、美術館で試み

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。

「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんらが90年代以降、日本に紹介。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館

能動的に作品と接する

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊さんは、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田さんは、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田さんは「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」

ルポ 潮流

小学校 公共施設

対話型の美術鑑賞

他者との関係を築く

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英さんは「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美さんがいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子さんによると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

ガイドスタッフの川上好美さん（左）の案内で、絵画作品を見る来館者＝東京都千代田区の東京国立近代美術館で

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校で

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンさんらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子さんが90年代初頭、日本に〝輸入〟。福さんが教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋さんによると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達さんは話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

第3種郵便物認可　神奈川新聞　2015年（平成27年）3月27日

ルポ 潮流

他者との関係を築く

小学校などで対話型の美術鑑賞

美術館で絵画や彫刻、写真の魅力に触れ、解説で知識を得るのは楽しい。だがそれにとどまらず、見るという行為自体を問い、他者との関係を築く契機とする試みが広がっている。現場を訪ねた。

能力引き出す

東京都の西東京市立保谷第二小学校で2月中旬、4年生を対象にした「鑑賞授業」があった。

5、6人ずつのグループに分かれ、はがき大のアート作品が50枚ほど、伏せられた状態で机上に広げられる。子どもたちは順番にそのうち2枚をめくり、共通点を見つけて意見を言う。「空の色が似ている」「両方とも、この中に人物がいる」。その後全員で、プロジェクターで映し出された「鳥獣戯画」を見て対話を重ねた。

授業を担当するのは、認定NPO法人「芸術資源開発機構（ARDA）」。副理事長の三ツ木紀英は「友達の見方を知ることも大切。言語能力と批判的にものを見る能力が引き出される」と話す。西東京市教委は2014年度からこうした授業を取り入れ、16年度には市内の全19校に拡大する。

持ち帰るなら

東京・竹橋の東京国立近代美術館は03年から、研修を積んだガイドスタッフによる約1時間のツアーを続けている。毎日午後2時にスタート。申し込みは不要。その場に偶然居合わせた人が参加する〝一期一会〟のイベントだ。

2月のある日、4人が参加した。ガイドスタッフの川上好美がいざなったのは、常設展示の一角。岸田劉生「道路と土手と塀（切通之写生）」や中村彝「エロシェンコ氏の像」など6作品から「もし持って帰っていいとしたら、どれを選びますか」と問われる。「ぐっと迫ってくる」など、選んだ理由を発表する。見知らぬ人の、思いも寄らない意見を聞くのは実に新鮮な体験だ。

同美術館の一條彰子によると、ガイドスタッフは約40人。プログラムや進行は当日の担当スタッフに委ねられている。それぞれが工夫を凝らした資料は館内に蓄積され、別のスタッフが利用できる仕組みだ。

論理的に理解

こうした対話型の美術鑑賞はニューヨーク近代美術館の教育部長だったフィリップ・ヤノウィンらが1980年代に開発した。そこで教育を受けた福のり子らが90年代以降、日本に紹介。福が教授を務める京都造形芸術大アートプロデュース学科は、独自の鑑賞プログラムを1年生の必修授業にする。

同大准教授の伊達隆洋によると、学生はまず、「私」の印象は「私にとっての真実」でしかないと相対化する過程で価値観を揺さぶられ、混乱する。だが「他者にとっての真実」もあると実感し、作品に抱いた印象の根拠を言葉で交わすことで、たとえ結論は違っても「ここまでは同じ」という合意点を見いだすことができるという。

同大のアート・コミュニケーション研究センターは、他者との関係性を向上させる鑑賞プログラムを美術館や教育現場で普及させるほか、看護学生や企業の社員を対象にした研修も行う。患者や同僚との人間関係に正解はない。共有する目的に向け、折り合える地点を探り出すことを目指す。

「うわべのコミュニケーションでは、価値観が違う人と同じ社会で付き合っていくのは難しい」と伊達は話す。好悪の感情に支配されず、他者を論理的に理解する。まさに今の社会に必要な資質ではないだろうか。

＝次回は5月掲載

ボランティアの女性に促され、アート作品について意見を述べる子どもたち＝東京都の西東京市立保谷第二小学校

能動的に作品に接する

アートライターで大正大非常勤講師の藤田令伊は、近著「アート鑑賞、超入門！」（集英社新書）で、能動的に美術作品に接するコツを伝えている。

「時間をかけてよく見る」ことに始まり、「正しい」「間違っている」という尺度を排し、作品に「なぜ」と問いかけること。さらに同じ作品を肯定的な見方と否定的な見方で捉える思考実験を勧め、「感性的見方と知性的見方」「『知識』の功と罪」などに話題を広げている。

藤田は、アート鑑賞が秘める効能は高く「それを生かすべき時代的背景が成熟している」と話す。「アート鑑賞によって『人の身になる』という他者の視点を得ることもできる。他者と共存しなければならない今の時代、それが鍵になる」

東日本大震災と原発事故が起きたとき、藤田は「それまでの『人任せ』な姿勢を痛切に思い知らされた」という。「アート鑑賞には、主体性をはぐくむ力もある。楽しい上に〝御利益〟も大きいのです」